

## II 静岡県の植生概観 Übersicht der Vegetation in der Präfektur Shizuoka

静岡県は太平洋に面した海岸線から海拔 3,000m をこえる富士山頂までを占め、自然環境は多彩であり、その要となっている緑、すなわち植生も多様に展開している。静岡県における、広域的な植生域は、低地より、ヤブツバキクラス域、ブナクラス域、コケモモートウヒクラス域およびコマクサーイワツメクサクラス域の4つの植生域にまとめられている。

Fig. 5 静岡県の植生域区分  
Gliederung im Vegetationsgebiete der Präfektur Shizuoka

植生界 (海拔高) Höhenstufe (Höhe ü Meer)	植物社会学的クラス域 Gebiete der pflanzensozio- logischen Klassen	植生帯 Vegetations- stufe	代表的潜在自然 植生 Regionale poten- tielle natürliche Vegetation	代表的現在植生 Repräsentative reale Vegetation
2,600~ 2,700m-	コマクサーイワツメクサクラス域 Dicentro-Stellarietea nipponicae-Gebiet	高山帯 Alpine Stufe	草原 Wiesen	(自然草原) Natürliche Wiesen
1,600~ 1,800m-	コケモモートウヒクラス域 Vaccinio-Piceetea japonicae-Gebiet	亜高山帯 Subalpine Stufe	常緑針葉樹林 Subalpiner Nadelwälder	自然林 Natürliche Wälder
700~ 900m-	ブナクラス域 Fagetea crenatae-Gebiet	山地帯 Montane Stufe	夏緑広葉樹林 Sommergrüner Laubwälder	二次林 Sekundärwälder
	ヤブツバキクラス域 Camellietea japonicae- Gebiet	低地・丘陵帯 Colline u. planare Stufe	常緑広葉樹林 Immergrüner Laubwälder	二次草原 (耕作地) Sekundärwiesen (Kulturflächen)

4つの植生域にまたがっている静岡県の植生は、細かな立地条件の差異と人間活動の影響とに応じた現存をしている。静岡県下でも、地域によって環境、土地利用形態が多様であり、それに応じて現存植生の配分は地域毎にことになっており、地域特性ともなっている。

本項において、静岡県の植生が 1. 南アルプス地区、2. 富士山地区、3. 伊豆地区、4. 静岡・清水地区、5. 掛川・磐田・浜松地区、6. 天竜・佐久間地区の6地区に分けられ、概観的考察が行なわれている。

### 1. 南アルプス地区 Minami(Süd)-Alpen-Bezirk

赤石山脈の南部は、光岳から聖岳、赤石岳、荒川岳、千枚岳、小河内岳、塩見岳まで3,000m級の高山が南北につらなり、急峻な壮年期の地形を示している。この山系の東側が静岡県に帰属

している。海拔高度的に、山足部にあたる大井川の源流部の海拔800～1,700mはブナクラス域に属し、海拔1,700m付近から海拔2,700m付近にかけての中腹部は亜高山帯になり、シラビソ、オオシラビソ、コメツガなど亜高山針葉樹林が大部分を占めている。海拔2,700mを境界にそれより高海拔地の山稜、尾根部、山頂部などはコマクサーイワツメクサクラス域にまとめられ、さまざまな高山植生が生育している。

高山帯には、南アルプス特有の寡雪地型の群落が見られる。ハイマツ低木林（コケモモハイマツ群集）や風衝矮生低木群落（コメバツガザクラミネズオウ群集）、さらに、カール地形の不安定立地に崩壊地植物群落（コマクサーイワツメクサクラス）が発達している。太平洋沿岸の山地、高山帯であり、冬季において少ない降雪量と、急峻な地形のために雪田植生（タカネヤハズハハコーアオノツガザクラ群集他）の生育地は限られている。

亜高山帯はシラビソ、トウヒ、コメツガ、オオシラビソなどの亜高山針葉樹林（シラビソオオシラビソ群集）が発達し、乾生立地などにはコメツガの優占する林分が広がっている。急傾斜地やV字渓谷沿いには夏緑広葉樹林であるダケカンバ林やミヤマハンノキ林（ミドリユキザサダケカンバ群団）が発達し、隣接してより不安定な立地には亜高山高茎草原（シナノキンバイミヤマキンボウゲ群団）が生育し、盛夏はさまざまな色を呈する草花が訪れる人々の目を楽しませている。

しかし、大井川の源流にあたるこの地域は古くから森林の伐採が進んでおり、広範囲に伐採地や伐採跡の代償植生で占められている。海拔1,700mをこえるコケモモトウヒクラス域まで、谷部にはスギの、中腹以上にはヒノキ、カラマツの植林が多い。

ブナクラス域は、海拔約1,700mを上限としている。山地帯のブナ林（ヤマボウシブナ群集）の生育はあまり良好ではなく、渓谷ぞいにイヌブナ林（ハクウンボクイヌブナ群落）が少面積残存している。井川ダム周辺の大部分の山地はミズナラを中心とする夏緑広葉樹二次林でおおわれている。自然生渓谷林も今日ではほとんど残存林分が見られない。

## 2. 富士山地区 Mt. Fuji-Bezirk

富士地区は、静岡県東部に位置しており、富士山の広大な山体の南斜面部とその裾野、愛鷹山および箱根の外輪山の西斜面を含んでいる。富士山麓一帯は観光地として、様々な開発が進行し、また自衛隊の広大な演習地などもあり、残存生育している自然植生は富士山の高海拔地（海拔1,700m付近以上）に限られている。

富士山は、新期の火山であるために、高山帯に相当する立地は、水分保持力に乏しいスコリアを基盤とし、移動がはげしく、きわめて貧弱な植生である。特に日本の高山帯を代表する植生の一つであるハイマツ林が見られないのが大きな特徴である。移動のはげしい火山砂上にはイワスゲーイワツメクサ群落（コマクサーイワツメクサクラス）が疎生している。

亜高山帯は海拔2,600～2,700mを上限とし、コメツガ、シラビソ、オオシラビソなど亜高山針

葉樹の優占する自然林（シラビソ—オオシラビソ群集）によって大部分が占められている。さらに、より不安定な立地ではダケカンバ林の生育地となっている。

ブナクラス域では、太平洋側に分布するブナ林（ヤマボウシ—ブナ群集）が富士山の中腹に局所的に残存している。また、土壌水分の含量の多い緩傾斜地にウラジロモミ林が目立っている。溶岩地帯の乾生立地にはヒノキ林（キンレイカーヒノキ群集）が分布している。

ブナクラス域の大部分の現存植生は、植林地が優占している。富士山南斜面や箱根西斜面はヒノキ植林が広大な面積をしめている。

海拔 800m 以下はヤブツバキクラス域に入るが、常緑広葉樹林の残存林分はきわめて少ない。低地は、ススキ草原、人工草地、シバ草原（ゴルフ場）、水田雑草群落などで占められている。

### 3. 伊豆地区 Izu-Bezirk

伊豆地区には、沼津—熱海を結ぶ線より南部の伊豆半島全域が含まれている。伊豆半島は天城山の 1,406m を最高地点とし、一般に急峻な地形を有している。しかも立地的に不安定なフォッサ・マグマ帯でもあるため山地崩壊も多くみられる。平坦地が少なく耕作地、住宅地など積極的な土地利用がいちじるしく制限されている。富士箱根伊豆国立公園の一部にあたる豊かな自然が多く残されている。現在観光事業に伴う土地開発が主として半島の東側より急速に進められている。

天城山一帯は広く国有林として管理、維持されているが、太平洋岸型のブナの自然林（ヤマボウシ—ブナ群集）が比較的まとまって発達している。天城峠付近の北向斜面海拔 600m 付近にもブナ林がみられる。常緑広葉樹林のアカガシ林、渓谷にはシオジ林（ミヤマクマワラビーシオジ群集）が残存生育し、ところによってササ草原が広がっている。天城山西側の天城牧場ではオニウシノケグサ、カモガヤなどの牧草が広がっている。隣接する山地部は伐採、火入れ跡地にタンザワザサやアマギザサの草原がみられ、開放景観を呈している。

伊豆半島のヤブツバキクラス域では、残存自然植生は少なく、主としてスギ植林に変えられている。また、海岸部ではミカンを中心とする常緑果樹園や土地造成によるススキ草原がとくに目につく。

ヤブツバキクラス域の自然植生として、モミーウラジロガシ混交林（シキミーモミ群集他）が浄蓮の滝付近に残存している。さらに天城峠や諸坪峠、猫越峠～金冠山間などにはアカガシ林が点在している。低海拔地ではスダジイ林（ヤブコウジ—スダジイ群集）が尾根部や神社林に点在する。しかし森林植生の大部分は、スダジイ、タブノキなどの常緑樹の萌芽再生林で、半島西部に広く分布している。また凹状地ではカラスザンショウ、アブラギリなど夏緑広葉樹と混生林分が半島南部に分布している。海岸ぞいの風衝のはげしい急傾斜地は、最前線にイソギク—ハチジョウススキ群集にまとめられている海岸風衝草原が生育しており、その後背側には、トベラ、マサキ、ウバメガシなどの風衝低木林が、西伊豆地方の松崎、石廊崎間などに生育している。

溪谷ぞいの適潤立地の大部分はスギ植林でしめられるが、湯ヶ野付近にはケヤキ林（イロハモミジケヤキ群集）が残存し、溪流にはツルヨシ群集、壁面にイワタバコ群落などが小面積づつであるが見られる。静岡県下の海岸付近の南向の傾斜地はミカンを主とする常緑果樹園がとくに広い。

河川にそった狭い沖積地は水田（ウリカワーコナギ群集、ノミノフスマーケキツネノボタン群集）となっており、その上流には、この地方特有の「ワサビ田」が見られる。

#### 4. 静岡・清水地区 Shizuoka und Shimizu-Bezirk

静岡・清水地区は安倍川を中心とし、1,000mを越える山地、静岡市街地および周辺域など駿河湾にのぞむ低地・沖積地とからなりたっている。

この地区の自然植生あるいは自然度の高い植生は静岡市を中心とする地域に集中しており、市内の護国寺や八幡山、久能山、用宗付近に残存自然植生として常緑広葉樹林のヤブコウジースダジイ群集、ミミズバイースダジイ群集などが生育している。

沖積地を除く広い地域はスギ、ヒノキ植林によりしめられている。アカマツ植林はこの地域ではごく稀で清水港東北部の丘陵地に小面積のみみられるにすぎない。クロマツ植林は安倍川河口、大井川河口の砂丘にそって帯状の広がりがみられる。

クスギコナラ群集やクリーコナラ群集にまとめられる夏緑二次林は海拔400~1,000mの範囲の尾根ぞいに点在している。常緑萌芽林は久能山の南面などにまとまった植分がある。ブナクラス域ではアカシデ、イヌシデなどのシデ林やクリーミズナラ群集にまとめられるミズナラ林が生育し、竜爪山北面から真富士山にかけての山地に分布している。

海拔800m以下のヤブツバキクラス域には、果樹園、耕作地が目立って多い。果樹園（ミカン畑）は低地帯の低地から丘陵部の南面にかけて海拔300m付近まで分布している。さらに、高海拔地には茶畑が位置し、乾生な風衝地にも分布している。果樹園は清水港に面した南斜面や日本平、高草山南面などにも分布している。低地帯は水田耕作地（ウリカワーコナギ群集）となっている。大規模な工場等の進出がみられ、無植生地が広い。

#### 5. 掛川・磐田・浜松地区 Kakegawa, Iwata und Hamamatsu-Bezirk

大井川の西部、天竜川から浜名湖に至る太平洋岸の低地帯がこの地区に含まれている。

天竜川の過去いくたびかの氾濫によって形成された河成地形は低湿地と自然堤防、さらに、海拔100~200mの低平な丘陵とからなっている。さらに浜名湖と遠州灘に面した長大な海岸線と御前崎にみられる砂嘴など、海岸地形も大きな特徴となっている。

沿海部に面したこの地域は県下でも温暖な地域であり、とくに浜名湖周辺は暖地生のルリミノキやイチイガンなどの生育地となっている。三方原台地は畑地や人家のまわりは防風林も兼ねたイヌマキの生垣が多い。一方、都田川、馬込川などによって形成された沖積低地は水田耕作地で

占められている。旧東海道の街道筋には古くから集落も発達しており、クロガネモチ、タブノキ、クスノキ、クロマツなど自然林の残存としての大木が点在してみられる。

丘陵上部は風衝作用が強く、乾燥しやすい立地であるため、ほとんどの土地が茶畑に利用されている。静岡県特産の緑茶の栽培地となっている牧ノ原などでは蔬菜類の耕作地（カラスビシャク—ニシキソウ群集）が少ない。大井川ぞい掛川付近ではスギとヒノキ植林地が多い。また海岸部ではクロマツ植林が砂丘列にそって分布している。

スダジイ、アラカンなど常緑広葉樹の萌芽林は榛原郡相良町、小笠郡菊川町、大東町、掛川市、さらに西部の袋井市にかけての小笠山丘陵一帯に分布している。

沖積低地は水田耕作地（ウリカワーコナギ群集）で占められており、緑の多い古い集落も散在している。しかし、掛川—袋井、磐田、浜松などは都市化が進んでいる。

## 6. 天竜・佐久間地区 Tenryu, Sakuma-Bezirk

天竜川の流域である天竜・佐久間地区は、静岡県の北西部に位置しており、海拔 800m 前後の山地が重畳し、その間を多数の河谷が発達して複雑な地形となっている。

この地区は、海拔 800m 以上の高海拔地にブナ林（ヤマボウシ—ブナ群集）が分布しているが、大部分の面積がヤブツバキクラス域に含まれる。天竜川流域は古くから植林が行われ、地域のほぼ80%はスギ、ヒノキ植林でしめられている。尾根部の乾生立地にはアカマツが植林、二次林、半自然林の状態で生育している。

ヤブツバキクラス域の自然植生は、モミ林（シキミーモミ群集）やウラジロガン林（アカガシ—ウラジロガン群落）が周智郡北部にまとまった林分として残されている。また、佐久間湖付近の湖岸にはコジイ林などが生育している。コジイ林は海拔 150m 内外の谷沿いにまで分布し、一部萌芽林として残存している。

渓谷に面した急崖地にはシデ林やアカマツの自然林（豊岡村獅子ヶ鼻公園など）が多く生育している。溪流に接した谷状地にはケヤキ林（イロハモミジ—ケヤキ群集）が点在し、支流ぞいのはんらん原にはヤナギ林（コゴメヤナギ群集）も見られる。

低海拔地では、温暖な気候を反映し、天竜川河口部には自然林の残存林分としてミミズバイ—スダジイ群集などが分布している。

天竜地区では集落、耕作地、果樹園等は少なく、河川の流路沿いの沖積地などに限られた広がりが見られるにとどまっている。